

この時も大年の夜の一碗の茶は私の頭の中に浮かび上つてゐた。とは言へ、空想は無惨に空想であつた。

十日前父を喪つた私は、最早如何に願ふとて、大晦日の夜父と二人静かにゐて茶を啜る事はなし得ない。

父親に対して青年期までは大抵の者がさうであるやうに、私も父と二人ぎりになる事は窮屈至極なものであつた。処が、先年スペイン風邪といつた恐ろしい流行性感冒が猖獗した年、折悪しく上京中であつた父が神田の宿でこれに罹つて私が看護する事になつた。幸ひに父のは軽症らしかつたので、私は結局は宿屋の飯を食べて父の枕もとでのんきな十数日を送つたに過ぎなかつたが、雨の降る日などは朝起きるから寝るまで丸一日中父と顔を突き合せて過ごすといふやうな日もあつて、こんな事は此の時が生れて初めての経験なのに気付いて、独りで不思議な気持ちに打たれもした。父は退屈になると、私相手に古い記憶を辿つて私には珍らしい昔話をするのだつた。私も父の前だといふ観念からまだ少しこそばゆいやうな返事をしながらも、なほ川上の例のおつぺけべえの芝居を見物した話とか、ブランド將軍を迎へるために祖父が初めて燕尾服を購めた話などは、一段と面白く聴いた。この罪もない昔話のうちに、何時かしら私の父に対するはにかみも窮屈もこそばゆさも跡なく消えてゐて、つまりこの妙な宿屋住居の十数日間に父と私の親しみは新たに増して、私は父の前に子として一脱脱し新に父を見る眼が明いたのであつた。

この後間もなく、私は青年の客気から少し手に余る位な仕事

を始める事になり、そのために父はわざ／＼郷里から出て来て私と寢食を共にして私の仕事を扶けてくれた。かうして一つ仕事の上の心配も喜びも父子一つの心になり得て、一層父と私とはびつたりと気の合つた親子になりつゝ、あつた。——大晦日の夜の茶。私にもまた父にもあまり慌たゞしく忙しい、そして酬いられる事ない日夜が続くにつけ、この頃から大晦日の茶の空想は、私の乱れがちな頭のどこかに湧き出たのであつた。

私のこの仕事は間もなく失敗に終つた。そして私は疲れ果てた心身を郷里の家に運んで行つて、一言も叱つてくれない父の前に、謝りの言葉を出し得ず面伏な一夏を送つた。以来数年、辛うじて私が自分の行くべき路と覚しいもの、緒を見出し得たのがやうやく此の頃である。三十に近くまだ家すら成し得ない私を長子として持つ事が、時に親戚等の手前どんなに片身の狭ひ思ひをなされたらう。然しこの間とて、なほ一言の叱責もして下さらなかつた父は、総領兒である故に盲目的に私が可愛かつたのかも知れないが、然し、誰よりも私を理解してくれて、私に対するあらゆる不満をどつと堪へて私の行くままに私を行かしてやらふといふ、もつと大きな可愛がりやうであつた事を、生前も今亡き後にも私は覚えながら、無言の感謝を捧げ無言の寛恕を乞ふ事を今後とて何日までも続けるであらう。

不孝にも父を病中に喪つた私は、いまなほ病床にこれを草しつつ、ある。父の死に会うて十日、まだ痛烈な悲しみも甚深な悼みの心も湧かず、寧ろ安らかな心に病を養つてゐるけれども、それら父に対するさまざまの心持は、日を経るに従つて濃く且